

〈研究ノート〉

マックス・ヴェーバーから見た韓国資本主義

金 哲 雄

1 はじめに

マックス・ヴェーバーの宗教社会学には、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』と『儒教と道教』という二つの柱があるといわれている。そして、この両者の関係は、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の論点から、『儒教と道教』では資本主義の精神が欠如していたことが論証されていることにある。

ヴェーバーは『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を第一部の「信仰と社会階層」「資本主義の精神」「ルッターの職業観念＝研究の課題」と、第二部の「現世俗内的禁欲の宗教的基礎」「禁欲と資本主義」とで構成している。そして、その目的は、ほかならぬ西欧において近代資本主義が成立するに至った経緯について、16・17世紀の禁欲的プロテスタンティズムのエートスが関係した理由を詳細に分析することにあつた。したがって、そこでは経済的・政治的利害状況の局面は、とりわけ取り除かれることとなった。

それに対して、ヴェーバーが行った第二番目の研究『儒教と道教』では、近代以前の中国社会の分析から始まり、第一章から第四章の「社会学的基础」（その一「都市、君侯、および神」、その二「封建的国家と俸禄的国家」、その三「行政と農業制度」、その四「自治、法律、および資本主義」）という経済的・政治的利害状況の局面が出発点となって展開されている。そして、以下の第五章「読

書人身分」、第六章「儒教的生活指針」、第七章「正統と異端（道教）」、第八章「結論——儒教とピューリタニズム」という構成になっている。

とりわけ第八章「結論——儒教とピューリタニズム」において、儒教の倫理と禁欲的プロテスタンティズムの倫理を比較して禁欲的プロテスタンティズムが近代資本主義を生み出す一方、儒教は近代資本主義と相いれないものとした。また、儒教が精神的基礎になっている近代以前の中国における家産制は、近代資本主義に対して促進的に作用しにくく、財閥を形成するなど、「政治指向的資本主義」を生み出す方向へと向かうとされた。

ヴェーバーのアジア観は、富永健一『マックス・ヴェーバーとアジアの近代化』（講談社、1998年）によれば、ヘーゲルのアジア的停滞論やマルクスのアジア的生産様式論とは異なり、アジアの伝統的諸社会の多様性のなかで中国が日本やインドなどとは異なった特性を持つことを明らかにするものであった。このことから、これまでの「マックス・ヴェーバーと東アジア」、「マックス・ヴェーバーとアジア資本主義」に関する研究には、筆者の知る限り、「マックス・ヴェーバーと日本」、「マックス・ヴェーバーと中国」などに関するものが数多く存在するが、「マックス・ヴェーバーと韓国資本主義」に関するものは、日本、韓国を問わず、きわめて少なかったといえる。事実、『儒教と道教』に関連づけた「儒教と韓国資本主義」に関する研究は、全面的に展開されていない。今後、このような課題をその原典に徹底的に依拠しながら、深めていく必要があるだろう。また、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』と韓国資本主義との関連研究は、「儒教資本主義論」を除いては、あまり進んでいないのが現状である。

このような状況から、「マックス・ヴェーバーと韓国資本主義」という研究テーマは、儒教とプロテスタンティズムの両者の宗教的モメントを関連させた、きわめて意義のある研究課題だと思われる。というのも、韓国は、日本、中国と比較してもっとも儒教が生活に根づいているとともに、プロテスタンティズムが本格的に浸透した国だからである。鈴木崇巨『韓国はなぜキリスト教国になったか』（春秋社、2012年、188ページ）によれば、2010年の統計では、プロテスタントの教会数は5万3000余、信徒数は1210万人（全人口の約24.9%）と

推定されている。

以上のようなヴェーバーの宗教社会学、とりわけヴェーバーのアジア観から、本稿では、先行研究、拙稿を踏まえ、儒教とプロテスタンティズムの両側面に関連づけて、韓国資本主義を読み込んでいきたい。この解明によって、韓国資本主義の性格がより鮮明なものになるだろうと考える。

2 ヴェーバーの宗教社会学と韓国資本主義

ヴェーバーの宗教社会学に立脚し、『『儒教と道教』と韓国資本主義』（大阪経済法科大学『経済学論集』第29巻第2・3合併号、2006年3月）では、政経癒着（歴代大統領周辺での不正など）、財閥改革などの経済懸案に特徴づけられる韓国資本主義にとって、マックス・ヴェーバー『儒教と道教』が持つ社会的および経済的意義を明らかにしていくこと、そのためにはまず、理論的概念として『儒教と道教』のなかでも、とりわけ重要だと思われる家産制、支配階層などの項目に注目し、次にそれに依拠して、韓国資本主義の儒教的背景を分析している。

折原浩『マックス・ヴェーバーとアジア』（平凡社、2010年、19ページ）によれば、近代以前の中国において近代資本主義の内生的発展が阻まれている理由として、ヴェーバーはまず、近代資本主義的な「資本—賃労働関係」の形成に対する「氏族」の経済的要因に優越する、「民主的」抵抗に求めている。また、そうした氏族の存続と抵抗を「祖先崇拜」によって精神的に補強する正当儒教（宗教性）と、秦漢帝国以降の「家産官僚制」（政治—支配体制）との「個性的な互酬—循環構造」に注目する。中国のこの支配体制は、「皇帝であると同時に天子でもある支配者」を頂点に戴く、独特の二重性格を備えていた。ヴェーバーによれば、宗教性と政治—支配体制とのこの「互酬—循環構造」ゆえに、他の文化圏に比して遜色のない営利欲が、「合理的禁欲」を刻印されることなく、そして「産業資本主義」とは異にする、夥しい零細経営と「官職—政治寄生的資本主義」の軌道に誘導され、そのうえで発動され、展開されたの

であった。

ヴェーバによれば、儒教は、読書人的教養がひじょうに高い、支配階層である旧中国の官僚層（士大夫）の身分的倫理だと説明され、また、外側の形式とか儀礼とかを重視する「外面的品位の倫理」として特徴づけられるとともに、伝統主義という方向に向かうという性質をおびている。そして、家産制において、家産官僚は、皇帝の徴税請負人としての役割にのみ利害関心を有している一方、皇帝に従属しているので、その恣意によって出世したり、失脚したりして動かされやすかったとされる。ヴェーバーのこの指摘は、家産官僚制が韓国資本主義における政経癒着（官僚資本主義的性格、前近代的性格）の歴史的根源であり、また、韓国では今日でも、支配階層であった両班の生活様式とその意識が、経済生活などに大きな影響力を持っていることを示唆してくれている。

富に関しては、ヴェーバーによれば、儒教では、経済活動の尊重はいちじるしく、役人は財産を蓄積する機会をもっとも多く持った人物でもあったとされ、君子の全面的な道徳的完成のための普遍的な手段として評価されているのである。このような影響が現代の韓国でも根強く残っており、国家官僚になるために、受験戦争は想像以上のものがあり、科挙制度は本家の中国以上に深く根づいている。また、韓国の儒教は、ことに富の追求や蓄積を賤しいことと見なした反面、共同体や国家の仕事に携わることは、公のために尽くすものとして高く評価され、そこで、企業（とくに財閥など）は自己の活動が国家や民族のためであるという公的な性格を付与し、自己の財産や経営の安全を図るために権力に接近しなければならぬとされている。ここに、韓国的な政経癒着の要因があるといえる。

しかし、ヴェーバーが著した『儒教と道教』の主たる対象は、どこまでも近代以前の中国であった。したがって、『儒教と道教』を韓国に適用し、「韓国資本主義における儒教の歴史的根源」を具体的に解明していくことが必要となってくるのである。

「ウェーバーの儒教論——東アジアの経済発展と関連して——」（『経済史——西と東——』泉文堂、1991年）では、最近、日本とアジアのN I E S（台湾・韓国・香港・シンガポール）と言われる地域は、経済的に非常に発展しており、

いずれの地域も儒教文化の影響があるだけに、その経済発展は、儒教文化と無関係ではないかという議論が展開された。

ところが、ヴェーバー・モデルの近代化は、プロテスタンティズムに象徴される禁欲主義、とりわけ「現世拒否」(Weltablehnung)というピューリタニズムのきびしいエートスに支配されたイギリスやアメリカ合衆国においてこそ、近代化・工業化が達成されるのに対して、営利を是認し現世を楽観的に肯定する儒教文化がなぜその達成に結実しないのかを検証しようとしたものであった。そこで、このようなウェーバー理論によっては、今日の東アジアの経済発展を説明するには限界があるとされている。したがって、儒教が東アジアの経済発展における重要な要因となり得るかどうかが、また、その解明においてウェーバーの儒教論が依然として有効性を保持しているかが重要な研究課題になってくるのである。

儒教を東アジアの経済発展において肯定的に評価する、最近の儒教論の共通的认识は、その集団主義、教育重視、倫理的行動規範などを根拠にして東アジアの経済発展を説明しようとするものであった。しかし、これらの儒教の諸特徴は、ヴェーバーの儒教論(現世肯定、儀礼尊重、血縁関係の重視、普遍的手段としての富)の本質的な内容とは異なっているのである。儒教の諸特徴を考えるばあい、どこまでも、その本質に基づいているものかどうかをきわめて重要であると考ええる。

ウェーバーは、歴史を多元論的に説明し、そのなかでも、諸関連の究極的なところで重要な意義を持つものとして、とくに宗教と経済を挙げ、そして、この二つの土台のあいだに展開される諸要因の相互関連こそが歴史のダイナミクスなのであり、しかも、歴史の変革期には宗教が決定的な役割を果たすのだと力説する。このよう視点からして、儒教は、その遺産が近代思惟様式のなかに吸収され、それなりに評価されても、東アジアの経済発展において本質的に重要な役割を果たしたとはいえないのである。したがって、経済発展と関連した儒教的遺産を近代的な思惟様式のなかにどのように位置づけていくかという課題(例えば、プロテスタンティズムと儒教の相互関係)はあるにしても、依然として儒教と関連した官僚資本主義的性格、前近代性を引き続き解明してい

くという課題が残るであろう。

「韓国におけるマックス・ヴェーバー研究の歴史と現状」（大阪経済法科大学『経済学論集』第32巻第1号、2008年12月）では、マックス・ヴェーバー研究が韓国において今日までどの程度の深さと規模で行われてきたか、その歴史と現状を明らかにしている。これによって、「マックス・ヴェーバーと韓国資本主義」の研究テーマにとっての課題、その位置づけを明確にし、この研究テーマをさらに深めることができる。便宜上、韓国において社会科学が導入された時から1950年代までを第一時期にして、1960年代、1970年代、1980年代、1990年代、2000年以降の六つの時期に分け、それらの時期を韓国におけるヴェーバー研究の段階として捉えて、その歴史と現状を展開している。とりわけ、1980年代以降のヴェーバー研究におけるの特徴として、第一に、1980年以前には数編にしか存在しなかった、ヴェーバー研究に関する学位論文がおびただしく誕生している点、第二に、ヴェーバー研究において社会学、倫理、科学、資本主義の精神などの諸分野の理論が深まり、その学問的成果が成熟してきている点、第三に、ヴェーバー理論の実証的適用研究がさらに深化した点を挙げている。

このような展開から重要な課題が浮かび上がってくる。確かに、パク・ソンファン『マックス・ヴェーバーの韓国社会論』（UUP、1999年）など、『儒教と道教』に関連づけた儒教、韓国資本主義に関する研究がある程度、進展している。しかし、この点に関する研究が全面的に展開されている状況とはいえないだろう。さらに、このような課題をその原典に徹底的に依拠しながら、深めていく必要があるだろう。

また、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』と韓国資本主義との関連研究も、あまり進展していない。この点に関する最近の成果としては、全聖佑「プロテスタンティズムと韓国社会の近代化——ヴェーバー・テーゼの光に照らしてみた——」（『思想』第978号、岩波書店、2005年10月）がある。ここでは、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の批判的読解を通じて、韓国型の近代化プロセスにとってプロテスタンティズムが持つ社会学のおよび歴史的意義を探り、そして、西欧が近代性の唯一可能な「ヴァリエーション」だとするような「ヨーロッパ中心主義」を拒否しながら、韓国型近代

化における建設的および破壊的性格という二重性格を指摘して、その社会的仮説を立てている。その韓国型近代化を性格づける上で重要な要因だと主張されている、「プロテスタンティズムと儒教との相互干渉」についても、重要な研究課題として注目しておくべきである。

要するに、「韓国におけるマックス・ヴェーバー研究の歴史と現状」から『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』と『儒教と道教』を韓国資本主義へ実証的に適用する課題が、「マックス・ヴェーバーと韓国資本主義」という研究テーマに要求されているのである。

3 儒教と韓国資本主義

「儒教の経済思想と韓国資本主義——朝鮮王朝時代の経済思想をめぐって——」(大阪経済法科大学『経済学論集』第30巻第1号、2007年1月)では、ヴェーバーの宗教社会学、とりわけ儒教論と関連づけて、朝鮮王朝時代を中心に韓国の「資本主義萌芽論」を、とくに開城商人の事例を通じて展開するとともに、儒教の経済思想が朝鮮王朝社会の硬直化をもたらし、韓国資本主義の自生的発展にはマイナスの要因であったことを明らかにしている。

韓国資本主義の歴史的過程を論ずる際に、単純な「朝鮮社会停滞論」が肯定されたり、また、「植民地近代化論」や「植民地施恵論」が認められたり、ましてや、18・19世紀を通じてそれなりの経済発展があったとする「資本主義萌芽論」が否定されてはならないのである。

朝鮮王朝後期には、間屋制、マニファクチュアが存在しており、「初期資本主義段階」と呼ぶべき自生的な資本主義発展の萌芽が見られた。この自生的な資本主義の発展は、少なくとも韓国資本主義での工業化を可能にした歴史的条件であったと考えられる。しかし、19世紀に入った朝鮮王朝社会の経済は深刻な停滞と危機の局面を迎え、韓国資本主義の発展の自生的な経済発展はスムーズに展開されなかった。儒教を持って韓国の「資本主義萌芽論」を豊かにしようとする見解が存在していることは確かであるが、しかし、とくに「寡欲」

に代表される儒教の倫理は、支配階層としての両班の倫理であり、経済活動における血縁の重視、富を道徳的な完成のための普遍的手段として見るができる。そこからは、韓国資本主義を自生的に発展させることができなかったのである。

したがって、ここで展開されている儒教の経済思想に関連づけながら、「韓国資本主義における儒教の歴史的根源」を、具体的に解明していかなければならない。この研究テーマでは、マックス・ヴェーバー『儒教と道教』のその適用における有効性と、その中国との比較についての解明も要求されることになるだろう。

「韓国資本主義における儒教の歴史的根源——家産官僚制、家族制度を中心に——」（大阪経済法科大学『経済学論集』第31巻第1号、2007年12月）では、拙稿「『儒教と道教』と韓国資本主義」、「韓国の経済思想と韓国資本主義」の研究成果を踏まえて「韓国資本主義における儒教の歴史的根源」を家産官僚制、家族制度を中心に具体的に解明している。また、マックス・ヴェーバー『儒教と道教』の命題がその解明において基本的には有効であることと、中国などと比較しても韓国資本主義において儒教の歴史的根源が最も深いことがわかる。

朝鮮王朝の家産官僚制は、「純粹家産制」的な王権と「身分制」的な官僚勢力の間に相互利害関係の制度的結合を意味し、ここでは、韓国の社会秩序において半封建的な要素はより後退するようになるとともに、家産制は固定的な型のなかに因習化されていった。その最も重要な結果として、儒教、とりわけ恭順に、その土台を置いている伝統主義が招来されていったのである。

このような伝統的な韓国の家産官僚制が、その行政形態において少なくとも中国の国家構造の単純な複写品にすぎなかったが、しかし、韓国において儒教は、家族制度という原型を通じて、支配体系を正当化する統治イデオロギー、そして両班支配階層の日常生活の生活を規律する生活道徳として作動したのであった。それは、中国よりも観念的・形而上学的性格を持って、実践的な次元において「礼」、恭順をより強調し、また、厳格で閉鎖的な宗法秩序と長子優先の厳格な父系血統主義を固執していたのであった。

このように、中国において10世紀末に台頭した新儒学（朱子学）は13世紀末、

韓国に最初に紹介され、発祥地である中国においてよりもずっと長い期間、ずっと深く根を下ろししつつ、支配思想として存続することとなった。儒教の教化も、朝鮮王朝では国全体でそれを実践したのであり、また、両班支配階層は、その教養と品位を備えるため、ことに末業である商業に従事することはできず、大部分が寄生階級になってしまった。さらに、韓国の世襲身分的カリスマは、王族と少数の門閥が中央と地方の主要官職を独占していたのであった。

確かに、朝鮮初期の家産官僚制は、ヴェーバーが指摘している近代的官僚制の性格を持っていた。しかし、朝鮮王朝の社会を動かしている究極的な権力が、そしてその支配的イデオロギーであり、その道具化してしまった儒教が、伝統の守護と現状の維持を最善の目標としているならば、その合理的な運営方式自体は、現状維持へ服務する以上の役割を遂行することはできなかったのである。

以上、「マックス・ヴェーバーと韓国資本主義」という研究テーマの下で、ヴェーバー『儒教と道教』の命題や、そしてそれに依拠して「儒教と韓国資本主義」について探究してきた。次いで、これらに関する研究成果を踏まえて「プロテスタンティズムと韓国資本主義」という研究課題を中心に、「マックス・ヴェーバーと韓国資本主義」の研究をさらに深めていかなければならないだろう。

4 プロテスタンティズムと韓国資本主義

「朝鮮プロテスタントと平壤メリヤス工業——朝鮮プロテスタントの経済史的研究への一つの試論——」（大阪府立大学『白鷺論叢』第18号、1986年12月）では、日本植民地化下の平壤メリヤス工業を中心に、朝鮮プロテスタントが経済活動とどのように結びついたのか、そして彼らがそこでどのような役割を果たしたのかを、韓国における研究成果を参考にしながら明らかにしている。これは、朝鮮プロテスタントの経済史的研究への一つの試論にすぎないものである。

現在、韓国におけるプロテスタントの重要な地位を知るためには、その源流

となる19世紀末から20世紀初めにかけての、その浸透過程に遡らなければならない。ここで注目すべきことは、西北地方（平安道・黄海道）がプロテスタンティズムを受け入れるにあたって、最も熱烈かつ積極的な地方であったことである。鈴木崇巨『韓国はなぜキリスト教国になったか』（48～51ページ）によれば、「ネヴィアス方式」（自立的な教会活動、宣教師の海外派遣、聖書中心の教会、諸教派の協力精神、庶民への伝道など）によって、1890年には169名しか数えることができなかったプロテスタント教徒は、わずか20年後の1910年頃には16万人という爆発的な増加を見ている。その中心的な伝道地が、「東洋のエルサレム」と呼ばれたピョンヤン（平壤）であった。平壤のその当時の人口は、4万ないしは5万人ほどであったが、日曜日の礼拝に出る人が、なんと1万4000人もいたといわれている。

このように積極的にプロテスタンティズムを受け入れた、西北地方は、経済活動が活発な地域でもあった。一般に、プロテスタントと経済活動との結びつきに関しては、しばしば指摘されるのであるが、朝鮮においては、その典型を平壤メリヤス工業のうちに見出すことができる。彼らは、その工業の創始・発展においてきわめて重要な役割を果たした。確かに、平壤メリヤス工業は、日本資本の支配下で1937年の「繊維工業設置制限令」、1938年の「朝鮮工業組合令」によって活動が大々的に統制され没落に向かっていったが、その成功の意義は大きかったといえる。

韓国資本主義に関する最近の研究は、1867年開港前の封建制の胎内における資本主義の萌芽の存在に注目し、多くの実証的成果を示している。それは、個々にマニファクチュアを検証しえているし、確実に大きな社会的変動の存在を明らかにしている。そして、この資本主義の萌芽は、外来資本主義の進入によって成長が阻まれ、絶滅されたのではなく、たとえ歪んだ形態をとったとしても、成長変化をたどった。その一典型例が、日本植民地下の平壤メリヤス工業であった。このことは、植民地下の朝鮮において資本主義の萌芽がプロテスタントによって維持・成長させられていたことを意味する。

平壤メリヤス工業に関しては、梶村秀樹氏の研究業績がある。確かに、氏の平壤メリヤス工業に関する経済史的な位置づけ、そこでのプロテスタントの役

割についての見解は、的確なものではあるが、しかし、この見解はプロテスタントの役割が過小評価されており、この評価よりもはるかに、プロテスタントの役割は重要なものであったと考える。梶村氏のいう、初期におけるプロテスタントの役割のみならず、その継続・発展において果たした役割は、大きなものであった。この点に関しては、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』と関連づけながら、さらなる具体的な展開が必要になってくるだろう。

「プロテスタンティズムと韓国資本主義」（大阪経済法科大学『経済学論集』第33巻第1号、2009年12月）では、マックス・ヴェーバー「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」の命題からの視点、キリスト教の経済観、プロテスタンティズムと韓国経済史の関係を通して、プロテスタンティズムと韓国資本主義の関連について明らかにし、韓国資本主義にとってプロテスタンティズムが持つ経済史的意義を探っている。

プロテスタンティズムと韓国資本主義の関連について考える場合、韓国は、東アジア社会のなかで珍しくキリスト教、プロテスタンティズムが定着し、しかも1960年代以降の急速な経済成長の過程でプロテスタント人口が著しい増加を見せてきた社会であることを考慮すべきである。このような時期に、経済成長とプロテスタント数の増大が同時に進行していることは、マックス・ヴェーバー「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」の命題に関心を抱かせることが自然のように思われる。

キリスト教の経済観としては、勤労観、私有財産観、租税観、経営観、福祉観が挙げられるが、そのなかでも、とくに勤労観、経営観、福祉観はヴェーバーのいう「職業倫理」は密接に関連している。ヴェーバーによれば、「職業倫理」、「世俗内的禁欲」によって、プロテスタントの資本家や労働者たちは、経済活動に専念し、隣人愛を実践し、そこに彼らみずからの「救いの確かさ」を見たのであった。そして、その成果を持って貧しい人を救済し、分配を実践していることとするのである。

また、19世紀末のプロテスタント宣教師たちは、儉約、勤勉、正直など、経済生活に必要な徳目として勧奨した。植民地時代や解放後の経済問題に対してプロテスタントは、全国的な国土開発の強調と全国的な共産主義の脅威として

反応した。1960年代と70年代においては、経済的に貧しく、搾取を受けている労働者の問題に関心を向けていった。1980年代では、生産手段と資源および生産利益の不平等な分配問題、政府の偏重した財閥支援、そして資本主義に対する批判、という三つの問題に集中した。さらに、これらの問題点への解決策を、キリスト教、プロテスタンティズムの観点から優先順位の調整、経済と倫理の関係の再定立、キリスト教の経済倫理の基礎、企業に対する聖書の理解、反企業情緒の解消、キリスト教的経済政策（「治める」の経済政策）に求めたのであった。

このような課題に関しては、2004年5月、韓国キリスト教会の韓国キリスト教倫理学会と、韓国福音主義神学会の韓国福音主義倫理学会が共同して、「経済問題とキリスト教倫理（경제 문제와 기독교윤리）——キリスト教徒として清い富者になれるのか？（기독교인으로서 깨끗한 부자가 될 수 있는가）——」というテーマでの研究成果にも注目する必要があるだろう。

また、徐正敏『韓国キリスト教史概論』（かんよう出版、2012年、88～9ページ）において、次のような課題が提起されている。1970年代、そして1980年代、韓国社会が経済的な高度成長を成し遂げた時期、韓国キリスト教会は、政治、経済、社会、文化に対するプログラムと、その牽引力は著しく大きくなったのであるが、しかし、第一に、既得権の立場を取り、有利な特権が形成された点、第二に、過度な世俗化に追随して、物質中心、成長中心、外面中心の教会像が形成された点、第三に、外来宗教としての違和感を克服できなかった点、第四に、分裂教会のイメージをどれくらい克服しているかという点、第五に、重い社会的責任を担っているかという点、という五つの課題に韓国キリスト教が直面しているのだという。

このような韓国の状況は、「今日では、禁欲の精神は——最終的にか否か、誰が知ろう——この鉄の檻から抜け出してしまった。ともかく勝利をとげた資本主義は、機械の上に立って以来、この支柱をもう必要としない。……

『天職義務』の思想はかつての宗教的信仰の亡霊として、われわれの生活の中を徘徊している。……こうした文化発展の最後に現れる『末人たち』
 » letzte Menschen «にとっては、次の言葉が真理となるのではなかろうか。

『精神のない専門人、心情のない享樂人。この無^{ニヒツ}のものは、人間性のかつて達したことのない段階にまですでに登りつめた、と自惚れるだろう』(マックス・ヴェーバー著、大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店、1988年、268～9ページ) というヴェーバーの警告を想起させてくれているのである。

以上見たように、韓国経済史においてキリスト教、プロテスタンティズムがどのように反応してきたのか、韓国経済の問題点、とりわけ不平等な分配問題への解決策を、プロテスタンティズムの観点から見ることごとと、それと関連して、マックス・ヴェーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」の命題からの視点がどれだけ重要であるかがわかった。韓国資本主義の歴史的過程を考察する際、その発展はヴェーバーのいう「プロテスタンティズムの倫理」、「世俗内的禁欲」から主たる動因を受けており、韓国社会にとってもプロテスタンティズムと資本主義的發展の結びつきがある妥当性を持っていると考えられる。要するに、韓国資本主義にとってプロテスタンティズムがどれだけ大きな経済史的意義を持っているかを確認することができるのである。

プロテスタンティズムと韓国資本主義の関連については、本テーマの「プロテスタンティズムと韓国資本主義」、「朝鮮プロテスタントと平壤メリヤス工業」などにおいてある程度の研究を進めてきたが、決して十分だとはいえない。今後は、韓国の経済発展という側面と、韓国経済の問題点への解決策という側面との両面から、プロテスタンティズムと韓国資本主義の関連についての研究をさらに深めていく必要があるだろう。

「韓国プロテスタンティズムにおける儒教の影響」(大阪経済法科大学『経済学論集』第34巻第1号、2010年12月)では、儒教、とくにその権威主義が韓国プロテスタント教会とそのリーダーシップ形成に及ぼした影響を分析するとともに、それを手がかりに、韓国プロテスタンティズム、とくにプロテスタントの経済活動に及ぼしている儒教の影響を明らかにしている。

韓国プロテスタンティズムにおける儒教の影響は、19世紀末に二つの世界像が出会った時以来たえず潜在的に働いており、とくに1970年代以降、プロテスタンティズムに帰依する人々の急速な増大と、韓国の高度経済成長のダイナミ

ズムとが一致して起きた期間に現れている。全聖佑「プロテスタンティズムと韓国社会の近代化」によれば、韓国においては、おそらく他のどの地域よりもプロテスタンティズムと儒教という二つのまったく異なる世界像の強烈な相互干渉が存在するという。プロテスタンティズムは神教的・個人主義的な世界像であるのに対して、儒教は人間中心主義的・集団主義的世界像である。

儒教の中心的な柱は家であり、その第一次的な美德は孝行であり、この意味で儒教の集団主義的要素は、ほとんどもっぱら家主義という形で現れる。そして、この集団主義文化は権威を強調し、この権威を強調する文化的特徴は韓国社会と教会に影響を及ぼしてきた儒教文化、とくに儒教の政治文化に根ざしている。儒教文化は、韓国社会が集団主義文化を成す際に決定的な役割を果たしており、その最も重要な特徴が権威主義なのである。

プロテスタンティズムと儒教の関係を考える場合、その両者の調和に力点を置くのか、それとも対立、干渉に力点を置くのかによって、その見解が異なってくる。前者の見解の典型的な一例として、浅見雅一・安廷苑『韓国とキリスト教』（中央公論新社、2012年、134ページ）におけるキリスト教浸透の要因に関する見解を挙げることができる。それによれば、①韓国の原信仰が一神教的要素を持っていたので、一神教キリスト教を受容する下地となった、②朝鮮王朝の朱子学の理気二元論には、キリスト教の世界観に類似する点があった、③儒教の倫理を重視する姿勢が、キリスト教の倫理への接近を容易にしたのである。

この両者の関係について、筆者は、調和的、融和的な点もある程度はあると認めながらも、基本的にはその関係を対立的、葛藤的な観点からとらえ、そして、プロテスタンティズムに及ぼしている儒教の影響を克服すべき対象だと考えている。

儒教文化が韓国教会のリーダーシップに及ぼした影響についての次のような見解は、明らかに両者の関係を対立的な観点から見たものであろう。儒教的権威主義は、すべての人間関係を支配と服従の关系到定型化する傾向として、権威に対する強い服従、中央集権化された階層的性向、および地位に従う不平等と差別を受け入れる因習主義、という三つの特徴を現す。

このような儒教的権威主義の特徴は、韓国教会のリーダーシップ形成に次のような影響を及ぼしている。第一に、上位の権威に対する服従を強調することによって、キリスト教徒の実体性まで崩すしてしまうカリスマ的なリーダーシップ、第二に、堂会にすべての力が集中している中央集権的な制度を強調することによって、委任しようとしないう階層的リーダーシップ、第三に、教会における個人との関係が性別、年齢、信仰の年数などによる等差と差別を受け入れることによって、位階序列的な地位に従うリーダーシップとして現れている。

以上のような儒教的権威主義が韓国プロテスタント教会とそのリーダーシップ形成に及ぼした影響を手がかりにすると、韓国プロテスタンティズム、とくにプロテスタントの経済活動における儒教の影響は、次のように、教会における儒教の影響とはほぼ類似の内容が確認できる。

「儒教資本主義論」では、儒教社会は、位階意識が強いだけに社会秩序を正しやすく、国家の権威が尊重されていて、経済政策を実行する場合にも効果を上げることができる、と見なされている。このような儒教の肯定的役割をある程度は認めながらも、しかし、儒教的権威主義の経済活動における影響は、第一に、政府の巨大な権威が、経済と政治を滅ぼす原因となっているということ、第二に、政府と財閥の結託関係、官僚と企業の間広がっている不正腐敗の環が断ち切れてないこと、第三に、終身雇用制度、年功序列に基礎を置く昇進・給与制度が、非効率적であり、生産性を低下させていることに見られるのである。事実、現代の韓国では、このような権威主義的制度的下で、政経癒着が生じ、また、グループ企業の支配による経営の不透明性が見られ、さらに、所有と経営の分離ができなくなっているのである。

本テーマ「韓国プロテスタンティズムにおける儒教の影響」は、韓国プロテスタンティズム、とくにプロテスタントの経済活動における儒教の影響についての試論にすぎないのである。そのさらなる具体的な検証は、今後の研究課題になるだろう。

5 おわりに

以上は、「マックス・ヴェーバーと韓国資本主義」に関する8編の拙稿を、加筆・訂正しながらまとめたものである。本稿は、「マックス・ヴェーバーと韓国資本主義」の序章的性格をも持っている。ヴェーバーの宗教社会学、とりわけヴェーバーのアジア観から、本稿では、儒教とプロテスタンティズムの両側面に関連づけて、韓国資本主義を解明することによって、韓国資本主義の性格がより明確になったと考える。すなわち、韓国の資本主義的發展にとっては、近代的な思维様式のなかで儒教的遺産のある程度の肯定的作用を認めながらも、基本的にはプロテスタンティズムのその役割は大きかった。この点に関しては、ヴェーバーの見解は、その有効性を保持しているといえるが、しかし、その批判的検討も必要であろう。

儒教と近代化、資本主義化の関係については、相沢幸悦『現代経済と資本主義の精神』（時潮社、2007年、20ページ）によれば、ヴェーバーは、アジアの神秘主義的な儒教は、合理化を求める近代化とは相容れないものであり、日本だけが西ヨーロッパ的な封建制を経験するとともに、資本主義を完成品として受け入れることができたので、早いうちに資本主義化が進められたという。だが、相沢氏は、20世紀から21世紀にかけて、中国などのアジア諸国がダイナミックな経済成長を遂げつつあることを、ヴェーバーから批判的に読み取ることが大事である、と指摘する。

ヴェーバーの近代化論については、富永健一『マックス・ヴェーバーとアジアの近代化』（講談社、1998年、25～6ページ）によれば、ヴェーバーは、(1) 経済の領域における近代化：近代資本主義の形成、(2) 行政と法と政治の領域における近代化：近代官僚制と近代民主主義の形成、(3) 社会の領域における近代化：家ゲマインシャフト・氏族ゲマインシャフト・村落ゲマインシャフトの解体、およびこれによる近代家族・近代組織・近代都市の形成、(4) 文化の領域における近代化：呪術からの解放、およびこれによる合理的な精神

の成立、という四つの諸領域から成り立っているという。相沢氏と同様に富永氏も、ゲマインシャフトというのは、西ヨーロッパの精神である功利主義的个人主義とは異なるものであり、東アジア諸国も歴史的に共有してきた儒教倫理を再構成することによって、東アジア・ゲマインシャフトの構築に向かうことができるかもしれない、と主張する。これらの見解は、「東アジア共同体」に向けて、資本主義の成立期はともかく、アメリカのような金儲け一辺倒に陥った資本主義ではなく、「ゲマインシャフト資本主義は」の大切さを述べているのである。

ヴェーバーの見解に対する、これらの批判的検討を踏まえながら、プロテスタンティズムの韓国資本主義における促進的な役割と、その倫理の欠如から生じる問題点、また、儒教が韓国資本主義に対して促進的に作用しにくく、「政治指向的資本主義」を生み出す側面のみならず、儒教的遺産のその肯定的側面、さらには、プロテスタンティズムと儒教との相互関係（対立、干渉、調和）を、より具体的に実証していかなければならないだろう。

(参考文献)

- Max Weber, Die protestantische Ethik und der Geist 《des Kapitalismus, in: *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*, Bd. I, 1920. マックス・ヴェーバー著、大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店、1988年。
- Max Weber, *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie I, Konfuzianismus und Taoismus*, Viertel, photomechanisch gedruckte Auflage, Tübingen, 1947. マックス・ヴェーバー著、木全徳雄訳『儒教と道教』創文社、1971年。
- Max Weber, *Wirtschaft und Gesellschaft, Grundriss der verstehenden Soziologie*, vierte neu herausgegebene Auflage, besorgt von Johannes Winckelmann, 1956. マックス・ヴェーバー著、世良晃志郎訳『支配の社会学Ⅰ』創文社、1960年。
- 富永健一『マックス・ヴェーバーとアジアの近代化』講談社、1998年。
- 折原浩『マックス・ヴェーバーとアジア』平凡社、2010年。
- 相沢幸悦『現代経済と資本主義の精神——マックス・ヴェーバーから現代を読む——』時潮社、2007年。
- 박성환 (パク・ソンファン)『マックス・ヴェーバーの韓国社会論』UUP、1999年。
- 全聖佑「プロテスタンティズムと韓国社会の近代化——ヴェーバー・テーゼの光に照らしてみた——」『思想』第978号、岩波書店、2005年10月。
- 鈴木崇巨『韓国はなぜキリスト教国になったか』春秋社、2012年。

徐正敏『韓国キリスト教史概論』かんよう出版、2012年。

浅見雅一・安廷苑『韓国とキリスト教』中央公論新社、2012年。

金哲雄「『儒教と道教』と韓国資本主義」大阪経済法科大学『経済学論集』第29巻第2・3合併号、2006年3月。

金哲雄「韓国プロテスタンティズムにおける儒教の影響」大阪経済法科大学『経済学論集』第34巻第1号、2010年12月。